

中国地方にC町という、星がとてもきれいに見えることで有名だが、それ以外には何も無い田舎町がある。「星空の聖地」と崇める天文ファンが集まり、プロ顔負けのカメラで撮影し、SNSにアップしては楽しんでる。サラリーマンの小山正平もその一人である。

隣の県で生まれ育った正平は、小学生のころから父につれられてC町によく訪れた。それが今では結婚し、小学四年生のひとり息子、良太とよく観賞に来る。良太はさほど星に興味はないようだが、夜遅くまで起きていられるのがうれしいのか、ピクニック気分で行きつけてくれる。

まだ夜も蒸し暑い八月の週末、正平はいつものように良太と一緒にC町に来ていた。この日は流星群の出現がピークになる日で、絶好の撮影日だ。普通なら天文台近くの公園まで行って望遠鏡を構えるところだが、今回は少し趣向を変えて、近所の神社まで車を走らせてみた。

知る人ぞ知る「星降神社」という神社で、太古の昔、夜空で流れ星が五つに分裂し、その一つがこの地に落ちて神様となった、という言い伝えがあるらしい。神社越しに鑑賞する星空が写真映えしそうなので、ここを選んだ。

真っ暗な夜道に車を止め、鳥居をくぐる。

「おお、怖え。お化け出る？」

良太が大げさに身体をさすり、ついてくる。

「さあな。でも気味は悪いな」

肩を寄せ合い参道を歩くと、雑草が茂る石の階段に突き当たった。登った先にある本殿は古めかしく、真っ暗で扉の奥が見えない。本当にお化けが出てもおかしくないな、と正平は苦笑いしながら、

「よし、この辺りにしよう」

と言い、少し離れて機材の準備を始めた。

「ここ？ まじかよ」

不満を聞き流し、キャンプ用チェアを組み立てた。

「ここに座ってな。星がよく見えるから」

ピクセン製の天体望遠鏡にスマホをつないで、ピントをあわせる。よし、これで大丈夫、とひとりごちてタオルで汗を拭く。もう八時前だ。そろそろ星も顔を出す。

「いま、流れたよ！」

良太が流れ星を見つけたと声を張った。

「よかったな」と言いつつ、内心は一つ目を見逃したことが悔しい。焦るな、まだチャンスはある。

そこから一時間たったが、二個目が流れてこない。

「お父さん、僕おしっこ」

良太が股を押さえながら寄ってきた。階段を降りたところにトイレがあったので、正平がそう伝えると、

「わかった。行ってくる」

と言い、一目散に駆けていった。暗いので少し心配だが、男の子だし大丈夫だろう、と思った。だが、十分しても戻ってこない。うんちかな、と考えながらスマホの画面をのぞいてみると、ようやく本日二個目の流れ星が現れ、

「おお！」とおもわず叫んだ。

おや？ スマホの画面から目を離し、上空を見上げた。流れ星がとてもゆっくりと空を横切る。光の軌跡は残ったままで、いつまでも消えない。見たことのない光景だ。

流れ星はピンクの光をまとい、その瞬間、二つに分裂した。別れた流星の片割れはどこか遠くへ消えたが、もう片方はこちらの方角に向かってくるように見えた。

そんなバカな、と驚く。まん丸の炎は、ゴオオオオ、と新幹線の走行音のようなうなりをあげながら、雪だるまのように大きくなり、正平の方に迫り来る。

——ああ、死ぬのかな。

現実感はないが、死を覚悟した。目を離せないまま身を固くしていると、全身が急に熱くなるのを感じた。

「お父さん、お父さん」

目を開けると、良太が心配そうに顔をのぞいていた。どうやら気を失い、地面で少し横になっていたみたいだ。腕時計の針は夜八時半を指している。

「大丈夫。寝てたか」

「マジで心配したよ」

「ごめんな。さっき大きな流れ星見たよ」

そう言って星空鑑賞に戻ったが、怖くなった。あれは何だったんだ。死ぬと思った瞬間、記憶が飛んだ。

ふと本殿の方から気配を感じた。足早にそちらに向かったが何もなし。本殿の扉が少し開いているように見えたが、気のせいかな。良太が心配そうに顔をのぞきこんだ。

——なんだか疲れた。

星空観賞は適当に切り上げ、早めに帰宅した。

あの日から高熱が続き、会社を二日休んだ。ほかの症状はなく、熱が下がったので出社することにした。正平は日用品メーカーの社員で、今は広報部で働く。

「おはようございます」

朝八時半に出社すると、角田部長がこちらに来て「もう出社して大丈夫？」と声をかけてきた。この部は、部長をはじめ女性が大半で、わりとフレンドリーな職場である。

席に座ると、隣の佐藤早苗が声をかけたきた。

「小山さん、大変でしたね」

入社三年目の彼女は希望して広報部に昨年春に異動してきた。ぎっくばらんとした性格

で、家族をつれての社内パーティーがあったときは良太と遊んでくれたこともある。

「ごめんね、休み中に仕事代わってもらって」

「いえ、お互い様ですから、そんな」

早苗の方を向き、お礼をした。よく見ると、彼女の輪郭が少しぼやけ、緑色のモヤがかかっている。真っ白なシャツを着ているのに、汚れかな？　と思っただが、違う。

かすみ目かと目薬をさしたが治らない。じっと見ていると早苗が「どうしました？」と不思議そうにしたので、「いや、何も」とこれ以上の凝視はやめた。

早苗が会社を休んだのは、その三日後だった。

社員食堂で角田部長にそれとなく聞くと、妹が交通事故で亡くなったとのことだった。仲の良い妹で、相当ショックを受けているみたい、と沈痛な面持ちで話した。

土曜の朝は蒸し暑く、蝉の声が騒がしかった。朝から三十度に迫る猛暑のおかげで、目が覚めてしまった。壁掛け時計の針はまだ朝七時を過ぎたあたりだ。「こんな時間じゃないか」と正平は舌打ちした。

都心から一時間ほどのベッドタウンに我が家はある。小さいながらも念願のマイホームで、昨年購入した。

「あら、朝早いのね」

一階に降りると、妻の芳子がテーブルで新聞を読みながら、最近ハマっているという紅茶をすすっていた。

「暑くて起きた。いつまでこんなだろう」

正平のグチを聞き流した芳子は、

「今日、村田さんとランチ行くからねー。よろしく」

とだけ言い、新聞をまた読む。

そういえば今日、近所の村田一家とのランチ会の約束がある。村田家の娘、美咲ちゃんが良太と同じ保育園に通っていた縁で、家族ぐるみにつきあいが始まった。旦那の一也は正平より二歳年下で、地元のサッカークラブのコーチをしているスポーツマンだ。

近所の洋食レストランに正午に集まった。一也が上下黒のジャージ姿なのに対し、妻の恵美は空色のワンピースで着飾っているのが、何とも対照的でおかしかった。

しゃれた壁紙の店内を見回した後、料理を注文した。

良太もいつもどおり「お子様ランチ」を頼むと、さっさとゲーム機に向き合う。気恥ずかしいのだろう、目の前の美咲ちゃんとは目を合わせようとしない。

「そういえば」

正平が切り出す。

「この前、星空を見に行ったら、すごい流れ星を見たんだよね」

C町での出来事は芳子に伝えていた。ただ、気を失ったことだけは秘密だ。いらぬ心配をかけたくなかったし、信じてもらえるかわからない。良太にも口止めしていた。

「流れ星が空で真っ二つになるんだ。撮影できていればよかったなあ」

帰宅後に撮影データを確認しても、あのピンク色の流れ星だけは保存されていなかった。撮り忘れたのだろうか。

「ははは、それは残念でしたね、小山さん」

村田一也が爽やかな笑顔で励ましてくれた。

「あなたも高尚な趣味を持ってば？ サッカーばかりしてないでさ」

村田恵美がカールさせた長髪を揺らし、ケタケタと笑った。

ふと違和感を覚えた。一也を見ると、肩の周りに、青色のモヤがうっすらとかかっている。

「村田さん、ゴミが肩についてますよ」

と教えてあげた。

「え？ どこですか。取れましたか」

一也が手で払う仕草をしても、何も変わらない。

この感覚は以前にもあった。そうだ、会社で早苗に会ったときだ。彼女は緑色のモヤだったが、今回は色が違う。

「見間違いか。失礼」

恵美の方を見やると、彼女にも同じ青色のモヤがかかっていた。気味が悪かったが、口にはしなかった。

村田夫妻が離婚すると芳子から知らされたのは、ランチ会から一週間後のことだった。

「奥さんが昨日ウチに来てさ。泣きながら離婚するって」

芳子が陰しい表情で、テーブルで晩酌をしていた正平の真正面に座った。良太は自分の部屋にいる。

「旦那の浮気だって」

あのルックスなら言い寄る女性はいらるだろうな、と呑気に思った。

「仲よさそうな夫婦なのにな」

「そうよ、あんないい奥さんなのに」

曲がったことを嫌う芳子は憤懣やるかたない様子だ。一方、正平はここ最近での出来事の方が気になった。

会社の同僚、早苗の妹が亡くなった。その前に会ったとき、緑色のモヤが見えた。そして今回も同じだ。離婚した村田夫妻は二人とも青色のモヤ。不可思議な現象が続いた。

二つのケースに共通するのは、両方とも「別れ」がその後に訪れたことである。不可思議、どころではない、不幸が訪れる不吉な予兆だったかもしれない。

しかもモヤが見えるのは正平だけみたいだ。

——C町で星を観たときからか。

良太と一緒に星降神社に行き、失神した。それから謎のモヤを見るようになった。「別れ」を示すことが本当だとすれば、自分がその原因なのか、または別れを予見するのか、どちら

なのか。正平は急に怖くなり身震いした。

「行ってきまーす」

朝、ランドセルを背負い玄関で運動靴を履く良太の後ろ姿を見て、正平は「気をつけてな」と声をかけた。

——ウソだろ。良太の小さな背中から、緑色のモヤが上空に向けて出ていた。心臓が早鐘を打つ。

例のモヤだ。しかも妹を亡くした早苗と同じ緑色であることに衝撃を受けた。正平は落ち着けと自分に言い聞かせた。

「待て、良太」

「どうしたの？ 遅刻しそうだよ」

「……行つてらっしゃい」

何を聞けばいい。周りに死にそうな人や病人はいるか、とか？ その人が正平や芳子の可能性さえある。

正平は仮病でその日会社を休んだ。

何か手がかりはないかと良太の部屋に入った。漫画ばかりを置いた勉強机にゲンナリしつつ、本棚や机の抽斗を開けていく。汗だくになりながら、作業を続けた。

「どうしたの？」

ドアの向こうで、芳子が怪訝な顔をして見ている。

「勝手に良太の部屋、プライバシーーっつもの……」

「うるさい！」

自分でも驚くほどの大声が出た。気圧された芳子が退散した後も、片っ端から部屋を物色した。ゴロゴロと雷鳴が響き、雨の音が聞こえた。ゲリラ豪雨か、と外を見ようとすると、カメがいる水槽の上に小さな石があった。

ゴルフボール大の石をすばっと切断した半球のような、不思議な形をしている。

「なんだこれは」

正平が手に取ると、石は熱を帯び、手に伝わってくる。ただの石ではないのは直感で分かった。

帰宅後に問い詰めると、良太が星降神社から持ち帰った石だと分かった。最初は知らないふりをしていたが、最後は泣いて白状した。

「どこにあったんだ？」

「建物の扉が少し開いてて、見たら、まん丸のきれいな石があって。割れてたから半分だけと思つて……」

——トイレに行ったときか。なかなか戻らないから心配したが、これがご神体かもしれないと思うと、恐ろしくなった。最近の出来事はその罰なのだろうか。

深夜、二人は星降神社に向かった。雨は降り続けていたが、石を盗んだことを謝りたかった。

「神様、ごめんなさい」

良太が石を本殿にそっと戻す。片割れの石にぴったりと吸い付き、本来の丸い形に戻った。雨でぶ濡れの二人は両手を合わせて祈った。一瞬、丸い石がピンク色の光を帯びたように見えた。

以降、正平はあのモヤを見ることはなくなった。良太には二度と同じことはしないように言い聞かせた。

ある日の夜だった。良太が泣きながら正平のところへ走ってきた。

「お父さん、死んじゃったよ」

緊張が走り、正平の胸が波立つ。

「カメ太郎が死んじゃった」

良太が小学校に入るころに「ほしい」と言い、自分でお世話する、という約束で飼い始めたペットのカメだ。

緑色のモヤはペットとの死別を意味していたのだろうか。またはカメが誰かの身代わりになってくれたのか。深くは考えないようにした。

正平は良太を抱き寄せ、静かに泣いた。